建築論研究　第１号（2019）pp.038－044

建築論研究の新たな拠点づくりと地域的展開をめざして

市川 秀和　福井工業大学 建築土木工学科

１．はじめに――「建築論の京都学派」の立場

現在の日本建築学会での一研究分野として〈建築論 Theory of Architecture〉が確立するまでには、さまざまな立場からの議論や成果が数多く積み重ねられてきた歴史的経緯がある。それらの中でも京都大学の森田慶一と増田友也が中心となって創り上げてきた「建築論」研究は、ひときわ独特な特色を有し、かつ多大な学術的貢献を成してきたことも紛れもない事実である。かかる大正・昭和期の京都大学を拠点に森田から増田へと至る建築論研究の歴史と伝統、所謂「建築論の京都学派」と呼称される学術的な知の営みについては、その概要を既に拙著(2014)にて報告した❶。従って「建築」あるいは「建築論」を如何に問うにしても、筆者の立場は「建築論の京都学派」の知的遺産を軸にして思索する以外にない。

❶ 市川秀和 (2014)『「建築論」の京都学派――森田慶一と増田友也を中心として』近代文藝社。

さて森田・増田の没後35年が経つ21世紀の現在、建築分野に限ったことではないが、大学での研究環境は、高度専門化とグローバル化がますます急速に進展し、伝統ある研究のオリジナリティを維持しつつ新たに展開することは極めて難しいなか、少子化による後継者の確保と育成も深刻な問題となっている。さらに短期間での業績が日々求められる一方で、役に立つ実務教育が重んじられる時勢において、建築論の立場は極めて危機的な状況にある。「建築論の京都学派」は今後も残せるのか、建築論研究の存亡こそ直面する緊急課題と認識しなければならない。

このような危機的現実のもと本稿では、建築論の京都学派を今後も継続発展していくための一事例として、これまでに筆者らが取り組む建築論研究の新たな拠点づくりと地域的展開を紹介することで、「建築論とは何か」に応えることにしたい。

２．建築論（研究）の「内」と「外」――新たな研究拠点づくりに向けて

周知のように森田は、西洋古典のウィトルウィウス『建築書』❷に基づきつつ、建築の実存在様態が４つ（強さ・用・美・聖）の「価値」から規定されると説きなが

❷ 森田慶一のウィトルウィウス建築書・邦訳研究については、註1の拙著参照。

ら、その核心を「美」をめぐる問いに集約させた上で、かかる体系的考察の全貌を主著『建築論』(1978)に取り纏めたと考えてよいだろう。さらに森田は、こうした自らの思索を「内からの建築論」と明確に位置づけるとともに、今後の残された課題として「外からの建築論」を指摘したのであるが、「外」に関する具体的内容について何も提示してはいない。なお詳細は、同書107頁を確認されたい[3]。

❸ 森田慶一(1978)『建築論』東海大学出版会は、現在まで増刷されている。

さて森田以降の研究動向は、この「内からの建築論」の射程において進展してきたと言える。例えば森田の中心テーマである「西洋建築思潮史」の課題を受けて、元良勲のギリシアや大倉三郎のゼムパー、鳥田家弘・白石博三のイギリス近代、そして相川浩のイタリア・ルネサンス、前川道郎のフランス・ゴシック、渡部貞清のイタリア・バロック、向井正也のモダニズムなどが注目に値しよう[4]。

❹ 森田以後の西洋建築思潮史については、註1の拙著参照。

さらに森田の視座に建築学以外の学問領域(哲学・民俗学・地理学など)を積極的に取り込もうと挑んだ増田友也は、具体的テーマを海外未開民族の原始的な生活環境・トポグラフィーに設定し、「住むことの空間現象」を考察した。増田はこの後も「日本住宅の空間論」や「Ethnosの風景論」「琵琶湖周辺の集住・地域計画」など独自な研究展開を進めるのであるが[5]、一貫して「住むことDwelling」「住み着くことHuman Settlement」の存在論的究明であったのではなかろうか。晩年の増田が「建築論が伝統的に行われているが、住居論が比較的希薄ではないかと。本来は住居論というものは、建築論そのもののはずである。」(筆者要約)[6]と論及するところにこそ注目するなら、これは「住む」ことを扱わなかった森田への批判であるとともに、森田の残した「外からの建築論」に敢えて応えたものと理解できる。なお現在の都市史・都市論研究における多様な問題を「外からの建築論」に当てはめることは決して間違いではないが、さらにそれを増田に求めるのは適切ではないだろう。

❺ 増田友也の主な業績は、『増田友也著作集』(全5巻、ナカニシヤ出版)を参照。なお著作集には未収録の業績も数多く、「琵琶湖計画」は以下の文献を参照。『21世紀の日本　国土と国民生活の未来像の設計』(報告書＋図集／2冊1971)内閣官房内閣審議室、小野泰・谷口興紀(1971)「琵琶湖計画」地域開発 通巻81号、21世紀研究会編(1972)『国民生活と国土の未来像』鹿島出版会。

❻ 増田友也(1975)「住居の根拠について」(著作集・第5巻所収)。

こうして森田の残した「外からの建築論」に対して応えた増田の探究を引き継いだのが、室谷誠一の日本中世住居論(書院造・数寄屋造)や玉腰芳夫の日本古代住居論(寝殿造)であったと考えられる。付け加えて、森田と増田のそれぞれの論点を総合的に継承することに努めた研究成果が、田中喬「建築(的)事象の研究」と加藤邦男「ヴァレリーの建築論」ではなかろうか[7]。

❼ 室谷誠一や玉腰芳夫、田中喬、加藤邦男については、註1の拙著参照。

以上の「建築論の内と外」に加えて「建築論“**研究**”の内と外」にも配慮するならば、従来の森田・増田に拠る京都大学だけに踏み止まることなく、その外へ向けて新たな研究拠点づくりを積極的に努めることが、森田の残した「外」の意味する今一つの課題ではなかろうか。それは京都大学の建築論研究が、他大学と学術的に交流することだけではなく、さらなる別の「拠点」大学を創り出すことであろう。それは実のところ既に前川道郎が1982年に京都大学から九州大学へ移ったことで始まっていたのであり、そのほか福井大学(渡部貞清)

や滋賀県立大学(室谷誠一)、福山大学(喜多村幸夫)、広島工業大学(水田一征)、岐阜女子大学(粂田勲)、成安造形大学(人長信昭)、長崎総合科学大学(林一馬)、明石高専(藤原勉)、石川高専(櫛田清)などが知られてきたものの、その多くで教員ポストの継承確保すら困難になっており、そして中心拠点の京都大学においても確たる拠点として安泰では決してない。

建築論とは何かをめぐる幅広い研究活動を継続していくため、研究者や学生などによる厚い層を形成する必要性を考えるとき、従来の京都大学が主催する活動だけに頼るのではなく、各地域に根ざした固有な問題を発掘した研究活動と学生育成に取り組まなければならないのではなかろうか。つまり京都大学以外の研究拠点となる大学を増やしていくことへの努力こそが今後不可欠となると考えるものである。

ゆえに建築論の学術課題における内と外のほか、その研究拠点としての内と外の緊急性を自覚して重視し、現在の中堅研究者がそれぞれの大学にて新たな拠点確立に向けて努力するほかないと判断せざるを得ない。こうした危機意識のもとで筆者が、現所属の福井工業大学にて取り組んできた最近の7年間の試みを一つのケーススタディとして提示し、さらに考え進めたいと思う。

3．福井工業大学を一拠点とした建築論の地域的展開について

これまでに次の3点を研究教育活動の指針として進めてきた。

①小さな研究会の発足と継続運営

②地域的展開としての研究活動

③大学院博士後期課程の学生受け入れ

これら3点をめぐって一つ一つ簡潔に紹介したい。

3－1）建築論フォーラム「福井の地から建築史・建築論を考える」

北陸の小さな一地方都市・福井に根ざして活動したいとの思いから、上記の名称に拘って小さな研究会を発足させた。2013年の第1回では、森田慶一が福井大学での講義録を纏めた『西洋建築史概説』(1962)[8]刊行50周年に当たるのを好機と捉え、加藤邦男・京都大学名誉教授による記念講演を開催した。そして第2回は、森田に引き続き出講していた増田友也をテーマとし、また京都で増田の生誕100周年記念建築作品展も企画されたことに合わせて、福井では2年続けての開催に至った。こうした森田・増田と福井大学の関わりを経て、同大学工学部建築学科へ常勤教授として着任した渡部貞清を第4回で取り上げるなど、福井の地における建築論の思索に常に拘り、以下のように昨年までの6年間にわたり継続してきた。これに参加者の積極的な協力もあって現在の当研究会は、毎年秋季開催として定着しつつある。

❽ 森田慶一 (1962)『西洋建築史概説』彰国社。

第１回「森田慶一『西洋建築史概説』刊行50周年を記念して」

日時：2013年11月10日(日)13時半～ 17時半

場所：アオッサ６階 601-A 研修室(参加者36名)

講師：加藤 邦男……『建築雑誌』2014年2月号掲載

第２回「増田友也の思索をめぐって」

日時：2014年10月25日(土)13時半～ 17時半

場所：アオッサ６階 601-A 研修室(参加者22名)

講師：中村 貴志……『建築雑誌』2015年3月号掲載

第３回「増田友也の建築作品をめぐって」

日時：2015年11月29日(日)13時半～ 17時半

場所：アオッサ６階 601-A 研修室(参加者26名)

講師：人長 信昭……『建築雑誌』2016年5月号掲載

第４回「渡部貞清とイタリアと近代福井」

日時：2016年11月26日(土)13時半～ 17時半

場所：アオッサ６階 605 研修室(参加者20名)

講師：松本 静夫……『建築雑誌』2017年3月号掲載

第５回「日本の美意識と建築論―美と用の問い」

日時：2017年10月14日(土)13時半～ 17時半

場所：アオッサ６階 601-A 研修室(参加者17名)

発表者：杉山 真魚、佐々木 香織……『建築雑誌』2018年3月号掲載

第６回「増田友也から玉腰芳夫への思索を超えて」

日時：2018年10月28日(日)13時半～ 17時半

場所：アオッサ６階 605研修室(参加者18名)

発表者：西村 謙司、川本　豊 ……『建築雑誌』2019年3月号掲載

一地方の小さな研究会であっても、これまでの全６回の積み重ねから漸く運営の進め方が固まってきたように思われる。福井の地に現在も建築論の思索が僅かでも続いているのは、1952 (昭和27) 年からの森田・増田との繋がりに由来することから、こうした背景を重視し、福井の地で「建築論の京都学派」の地域的展開が如何に成し遂げられて来たのかを常に問い返しながら、この発展的継承こそが、今後も取り組む上での基本理念としなければならないと考える❾。従って森田のウィトルウィウス研究に基づく西洋建築思潮史、増田友也の日本住宅の空間論に始まる風景論・存在論的探究などが、当研究会の企画運営を具体的に進める前提であって、さらに広く学生や研究者などの育成・交流にも役立つように努めたい。

また当研究会は、日本建築学会北陸支部福井支所の企画事業にも位置づけられていることから、開催予告の通知や終了後の記録などは、毎回必ず学会誌

❾ 2013年発足の当研究会は、筆者の「建築論の京都学派」研究を実践する場でもある。ゆえに註1の拙著 (2014) 以降の主な研究成果は、以下の通りである。

●武田五一について……市川秀和 (2018)「武田五一のプロポーション論研究について」

●森田慶一について……市川秀和 (2019)「森田慶一「いみたちを・こるぶしえり」(1928) について」、市川秀和 (2015)「ウィトルウィウスの人物像と中世写本について」

●増田友也について……市川秀和 (2018)「増田友也の建築論における「非」について(2)」、市川秀和 (2016)「増田友也の建築論における「非」について(1)」。

なおそれぞれの概要について、武田は建築史学会誌、森田・増田は日本建築学会近畿支部研究報告集を参照されたい。そのほか、ウィトルウィウスと十八世紀ドイツ建築思潮に関して、次の拙論を発表した。市川秀和 (2016)「ウィトルウィウスとギリシアのドリス式オーダー」建築論研究会編『建築制作論の研究』中央公論美術出版。

『建築雑誌』に掲載されることになっている。そのほか、京都大学の建築論研究会の開催内容とも連携を取りながら進めていることは説明するまでもないであろう。

3－2）福井・北陸に根ざした建築論の地域的展開

建築論の京都学派から汲み出だされる多様な研究視座を福井・北陸の地域に根ざした研究課題へと注ぎ、独自な地域的展開を目論んできたことから、その具体的な課題として着手し、現在少しずつ成果が纏まりつつある事例を以下に提示する。

①真宗念仏の住まいと日本海側の雪国の原風景、そのほか

増田友也が博士論文の結論部分で触れたヨーロッパ民家の事例（ハイデッガーが着目したもの）のように「住まいと信仰」の問題は、近代機能主義住居論に対する批判でもあり、建築論における重要な課題である。これを後に玉腰芳夫や室谷誠一が究明することになり、さらにバロック研究で知られた渡部貞清[10]が、福井大学着任後、当地域の民家・町並み調査を通して「念仏の住まい」の課題を指摘した。こうした研究背景を踏まえて、北陸地域の浄土真宗が色濃く反映した「民家の仏間」あるいは「道場」の現地調査研究をまず福井県（越前）を対象に着手している[11]。

さらにこうした住まいと信仰を長い年月の中で形成させてきた地域固有の地勢や風土、近代的変容に着目し、日本海側（裏日本）の「雪国の原風景」を究明することに努め、また自然への崇敬や信仰にも留意して、住まいを中心とした生活環境を広く取り囲む「みどり」の文化的意味（都市公園・自然公園・森林風致等）も研究対象として捉えようと地道に取り組んできた[12]。

住まいと信仰をめぐる建築論の探究は、これまでの成果を基礎としつつ、さらなる徹底究明を目指して、越前から加賀・能登に至る広いエリアをフィールド調査の場とすることが今後不可欠であり、いっそう着実に継続研究して行きたいと考える。

そのほか、知識人の家族と自宅に着目して建築論的考察を纏めたものがある。それは、京都学派の哲学者・上田閑照による人間の生涯（三つの局面：人生、歴史的社会的生、境涯）の視座を援用して、詩人や哲学者の住まいの場所を現地実測調査等も含めて考察してきた[13]。

②北陸・沿海集落にみる集住構造と空間形成

増田友也の Ethnos の風景論は、滋賀県琵琶湖周辺の集落計画の報告書に付けられた経緯から明らかなように、地域風土と集住のあり方に着目したものであって、決して都市へと繋がる問題を取り上げたものではない。これを示唆する後の研究こそ、加藤邦男が、滋賀県鎌掛集落の詳細な現地調査に基づいて集住構造の解明を試みたものに他ならないであろう[14]。かかる増田から加藤に引

[10] 渡部貞清（1918～2011）については、以下を参照されたい。市川秀和（2000）「建築と風景の詩情――渡部貞清博士の建築論について」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第7号、平野忍・市川秀和（2016）「渡部貞清の建築論における民家への視座について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第59号。

[11] 市川秀和（2018）「越前の民家にみる「仏間」について――「住まうこと」の建築論」北陸都市史学会会誌 第24号、市川秀和（2014）「福井県の歴史的環境保存の歩み」『北陸信越地方の歴史的建造物』日本建築学会北陸支部歴史意匠部会。

[12] 日本海側の原風景やみどりの文化的意味について主な成果は、以下を参照。市川秀和（1998）「能登半島の風土と植生――風景論への一つのアプローチ」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第5号、市川秀和（2001）「等伯画「松林図」にみる能登の風景――日本海沿岸の原風景を求めて」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第8号、市川秀和（2008）「福井県における戦後の緑地運動とみどりの文化」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第15号、市川秀和（2014）「福井県の近代公園の成立について」『北陸信越地方の歴史的建造物』日本建築学会北陸支部歴史意匠部会

[13] 詩人・室生犀星と哲学者・西田幾多郎に着目し、以下の論考を発表した。市川秀和（2009）「室生犀星における「終の住まいと庭」室生犀星研究 第32号、市川秀和（2007）「室生犀星の“終の住まいと庭”」日本庭園学会誌 第17号、市川秀和（2003）「西田幾多郎の書斎「骨清窟」と哲学の現場」福井工業大学研究紀要（第二部）第33号、市川秀和（2004）「西田幾多郎の書斎「骨清窟」と「終の住まい」」石川県西田幾多郎記念哲学館：点から線へ 第45号、市川秀和・朝日海秀（2017）「西田幾多郎の書斎「骨清窟」と哲学の現場（2）」福井大

き継がれた研究視座を北陸地域・沿海の漁村集落に注ぎ、特有な舟小屋と住まい、集住の空間形成等を現地調査から解き明かそうと、現在試み始めている。先に報告した能登七尾の事例報告は、こうした問題意識から得た大きな成果であった[15]。引き続き、丹後半島等の先行研究[16]も参考にしつつ、能登半島から越前・加賀海岸、敦賀湾へと至る沿海集落を具体的なフィールドに設定し、現地調査を着実に遂行していく[17]。

③福井市の戦後復興と建築家の坂部保治・五十嵐直雄など

現在日本各地で戦後建築の調査研究が開始されている動向を踏まえ、戦災・震災都市として知られる福井市の戦後復興期に大きな役割を果たした、新制・福井大学の建築教員とその設計活動に着目する[18]。その建築教員とは、坂部保治と五十嵐直雄などであり、戦後初の福井市長・熊谷太三郎と連携して中心市街地が壊滅した福井市の復興事業を先導した[19]。具体的には、昭和27年の福井復興博覧会の会場となった福井市郷土博物館（現存・国登録文化財）や昭和32年の別格官幣社・福井神社、続く昭和34年の福井市体育館など、復興期を象徴する斬新なモダニズムの公共建築設計を担当し、その後の福井県建築界の礎を創ったのである。

また坂部と五十嵐は、京都大学の森田慶一・増田友也を福井に招聘して積極的な交流を持っていたことから、特に五十嵐の建築論「真壁の意匠」には、森田・増田からの影響が見出される。ここに建築論の京都学派の地域的展開が具体的事例として確認できるのであり、この基礎的な考察も徐々に進めているところである。

3－3）大学院博士後期課程での「建築論」の研究教育

地方私立大学の大学院生充足率は極めて厳しい現状にあり、高度な専門教育とともに将来の研究者育成を実践する上での大きな壁となっている。こうした現状を克服しようと福井工業大学では、2018年度より大学院博士後期課程「無償化」を決定したところ、全国各地から留学生を含む社会人を中心とした入学希望者が徐々に増え始め、それは大学と民間企業・公共団体との新たな関係構築、さらに今後重要視されるリカレント教育へと繋がる可能性を持っており、実際のところ少しずつ始まっている。

こうした動向にも対応すべく、博士後期課程募集要項に「建築論」専攻を明確にするため「大学院学則」を変更した上で、2019年度より社会人博士後期課程学生を市川研究室に迎えるに至り、本格的研究が始まっている[20]。これに続いて、本学卒業生の中で入学希望者も数名出てきており、それぞれの建築論研究に向けた事前準備に着手している。今後、日本海側の福井という一地方都市において建築論研究の地域的展開を担う若手研究者育成に向けて地道に取り組みたいと考えている。

学地域環境研究教育センター研究紀要 第24号、林晋・市川秀和（2016）「西田幾多郎田中上柳町旧宅について」哲学研究 600号。

⑭ 加藤邦男（1989）「集住の構造――「住まうこと」に関する空間論的考察の試み」季刊カラム 第113号

⑮ 筆者の博士論文提出（1996）後、故郷の能登七尾をケーススタディとして建築・町並み、集落の現地調査を15年近く取り組んできた主な成果は、以下を参照。市川秀和（2013）「第７章　近代七尾の町並みと住まい」、『新修 七尾市史16 通史編Ⅲ（近現代）』七尾市、市川秀和（2013）「能登七尾の近代にみる『脱･百万石』と『土着の心』」地方史研究 第364号、市川秀和（2014）「七尾市の登録文化財とまちづくり」、「能登の住まいと民家」『北陸信越地方の歴史的建造物』日本建築学会北陸支部歴史意匠部会。

⑯ 大場修編（2009）『丹後・沿海集落の空間構成とその形成』京都府立大学、日本建築学会編（2005）『集住の知恵――美しく住むかたち』技報堂出版。

⑰ 2019年度内に「敦賀湾沿海の舟小屋と漁村集落」を報告する予定である。

⑱ 新制・福井大学工学部建築学科について、戦前の福井高等工業学校からの歴史的変遷を考察した成果が、以下のものである。市川秀和（2019）「福井高等工業学校における建築教育について」福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 第25号、市川秀和（2019）「福井高等工業学校・建築科と建築教育について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第62号。

⑲ 建築家・坂部保治と五十嵐直雄については、以下の通りである。長田涼佑・市川秀和（2018）「建築家・坂部保治の経歴と建築活動について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第61号、市川秀和・朝日海秀（2018）「建築家・五十嵐直雄について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第61号、市

4．地方都市における独自な建築論研究をめざして

以上の本論より、建築論研究の新たな拠点づくりと地域的展開に向けた取り組みの一事例として、筆者らに拠る福井での活動について紹介した。ここから「建築論とは何か」に対する筆者の思いを汲み取っていただきたい。

最後に、建築論の現状について、もう少し述べておきたい。筆者が建築論研究に着手した30年程前には既に森田・増田の没後であったものの、前川道郎・田中喬・加藤邦男らが先導した幅広く活発な研究会が頻繁に開催され、とても充実した時期であった。しかし冒頭で明記したように、今後の建築論研究はいっそう厳しい現実の中に追い込まれると予想される。森田・増田、前川らの活躍した時代のような活況を見ることは難しい過酷な時勢の中で耐えつつも、かかる建築論研究の不動な意義を確信し、一地方都市にこそ実践できる独自な取り組みを模索していくことこそ、筆者が今後も変わることなく果たすべき課題であると言わなければならない。

川秀和(2019)「建築家・五十嵐直雄について⑵」日本建築学会大会(北陸)学術講演梗概集、市川秀和・朝日海秀編(2019)『建築家・五十嵐直雄と真壁の意匠』福井工業大学建築土木工学科市川研究室。

⑳ 京都大学工学部建築学科(田中喬研)を1972年に卒業した川本豊氏が、2019年4月に福井工業大学の社会人博士後期課程に入学し、「日本古典文学にみる住まい感覚の建築論(仮)」をテーマとして、これまで以上に建築論研究を進めている。川本氏と筆者は、既に以下の共同研究発表を行っている。川本豊、市川秀和(2018)「古典文学にみる「中の戸」の仕切りの建築論⑴――『栄華物語』の場合」日本建築学会近畿支部研究報告集 第58号、川本豊、市川秀和(2019)「古典文学にみる「中の戸」の仕切りの建築論⑵――『源氏物語』の場合」日本建築学会近畿支部研究報告集 第59号、川本豊、市川秀和(2019)「古典文学にみる「中の戸」の仕切りの建築論⑶」日本建築学会大会(北陸)学術講演梗概集